

ロバート・N・バトラー博士 追悼式

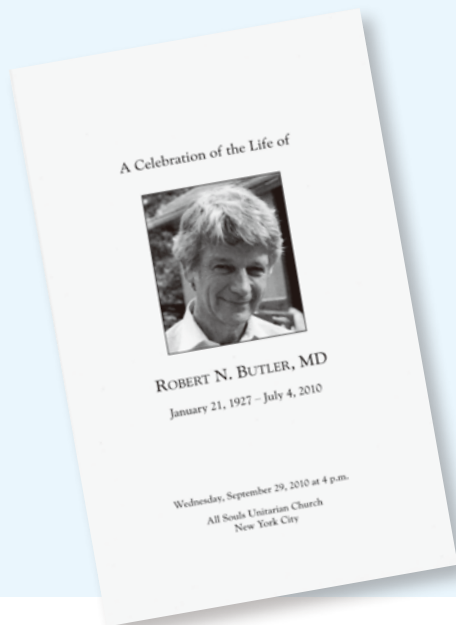
2010年9月29日(水)、16時よりニューヨークのマンハッタン、All Souls Unitarian Churchにてロバート・N・バトラー ILC米国センター理事長の追悼式が行われた。

会場には、青年時代から現在にいたるまでの数々のバトラー博士の写真が飾られ、世界各国から集まった約400名の友人たちを迎えてくれた。

ILCグローバル・アライアンスからは、森岡ILC日本顧問、グリーングロスILC英国理事長、フォレットILCフランス理事長、ペレイラILCドミニカ共和国理事長、ダイチマンILCアルゼンチン理事長、大迫ILCグローバル・アライアンス事務局長の6名が出席した。

バトラー博士の友人たち11名より弔辞が送られたが、ILCグローバル・アライアンスからは共同理事長の一人であるグリーングロスILC英国理事長が代表してお別れの挨拶を述べた。

バトラー博士の遺族から、博士の偉業を継承するため、高齢化に関する公共政策、教育、研究、啓蒙活動を支援する「ロバート・バトラーチャリティ基金」を設立したことが伝えられた。



■バトラー博士へのお別れと約束

Baroness Sally Greengross

Bobが常に私たちに与えてくれたメッセージの根幹にあったものは、「不可能なことは何もない」ということだったと、私は思っています。

彼が生涯追い求めてきた理念の実現に向けた行動、つまり高齢者の生活を改善し、高齢者が頻繁に受けている否定的な態度や差別を無くすための行動であれば、どんなことだってやり遂げられるにちがいない、という強い意思でした。

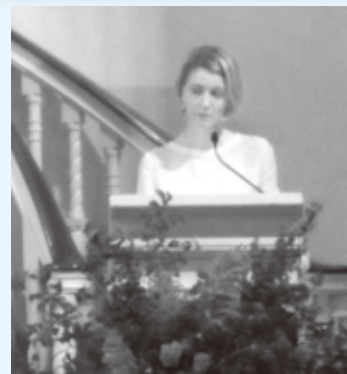
私たちがかつてないほどの長寿を与えられたことを、心から感謝し称賛すべきであると彼は信じていました。そしてこの信念は、彼の活動の隅々まで浸透していました。

彼はまた、周りの人に「自分は何でもできる」と信じこませることができた人でした。

私がまさにそうでした。

米国の特別議会と上院委員会の両方で、彼は私に対して「ヨーロッパにおける成功事例」について、7分で発言するように促しました。何の準備もない状況で、とてもそんなことはできないと訴える私に対して、彼は「君ならもちろんできるよ、サリー。自分が知っていることを話せばいいだけのだから。」とやさしく言いました。

その場を何とか切り抜けることができたのは、彼が私を奮い立たせてくれたおかげです。このように彼は、私たち皆に対して力



を与えてくれる最高の指導者でした。

彼が世界中の聴衆を感化していくのを側で見られるのは、私たちの特権だったと思います。彼はそれまでの政策や慣習に極めて大きな変化をもたらしました。彼の業績は広く知られ、「ageism」だけでなく「shortevity」という言葉も作りました。

しかし仕事を一歩離れば、Bobは私の親友でした。BobとMyrnaがロンドンの私の自宅に初めて滞在したのは、アレキサンドラが2歳半のときでした。昨年フィアンセと一緒にアレキサンドラに再会して、ボブが家族の中でどれだけ幸せなときを過ごしてい

たかを思い出しました。二人の可愛いお孫さんも一緒に、皆でビッグベンに上ったときもそうでした。

私の夫Alanが、Bobのためにロンドンの多くの史跡巡りのプランを作りました。Bobは、とてつもない距離を断固として歩く人でしたから、私はついて行くのに必死なことがよくありました。亡くなる直前に彼の本が出版されましたが、彼が最期までそれほど活動的でいられた要因は、彼自身の健康と知力維持に対する強い熱意の結果だと思います。

私を含め、世界各国のILCの仲間からのBobへの賛辞は、ILCグローバル・アライアンスの活動を発展させる原動力になっています。

「高齢者の持つ経済的、社会的な能力を認識し活用すべきである」というBobのメッセージに世界が耳を傾ければ、バランスのとれた、より人道的な世界が間違いなく実現します。ですから私は、ILCが発足した当初からBob、日本の森岡茂夫、フランスのFrancoise Foretteとともに関わってこられたことを大変光栄に思っています。

私たちは今後もILCの活動を通じて、Bobの精神やリーダーシップが世界にインスピレーションを与え続けることに貢献できると思います。そして私たちには、少なくとも自分達の力で達成できることはすべて行う義務がありますし、そうすることをお約束いたします。